

書評

大木隆生 編

胸部大動脈瘤ステントグラフト内挿術の実際

戸田中央総合病院副院長

石丸 新

本書の編者である大木隆生氏は、米国アルバートアインシュタイン医科大学血管外科学教授にして、東京慈恵会医科大学外科学講座教授・統括責任者の要職にある気鋭の外科医として知られている。米国での豊富な臨床経験を携え2006年に帰国。以来わが国の血管外科医の育成と血管内治療を中心とした先端医療の実践に日々奮迅する中で、やがてそれらの成果が編纂されることは必然であったといえよう。今回、胸部大動脈用ステントグラフトの国内導入時期に合わせ、満を持して本書を上梓した先見性と実行力には氏の面目躍如たるものがある。

欧米では1990年代後半に腹部大動脈瘤を対象として企業製ステントグラフトの臨床応用が開始されたが、わが国では専ら胸部大動脈瘤あるいは動脈解離について、

手作りのステントグラフトによる治療が行われ、今日まで多数の治療経験がある。しかし、個々に手作りされたデバイスが使用されている限り、その治療手法に普遍性を見いだすことは困難であった。

大木隆生編『胸部大動脈瘤ステントグラフト内挿術の実際』は、わが国に初めて導入された企業製ステントグラフトに関する本格的な技術解説書である。そのコンテンツを見ると、胸部大動脈瘤ステントグラフトの実施基準に始まり、当該治療法の過去と現況、TAGの米国臨床試験結果、治療の実際(基礎編)、対麻痺予防、トラブルシューティング、治療の実際(応用編)で構成され、これに経験例の成績および症例呈示が加えられていて、どこまでも実践の書であろうとする執筆者の趣意が読み取れる。実際に本書の扉を開く

と、平易かつ必要にして十分な表現に徹した説明文、これを補填すべく随所に配置されたイラスト、そして血管内治療の命ともいえるX線画像の鮮明さにその真骨頂を見ることができる。

編者は序文において、「われわれの経験のなかには成功例もあれば、必ずしも期待どおりの結果が得られなかった症例もあり、いくつかの裏技やデバイスの“癖”も分かりました。よい経験も悪い経験も本書に凝縮し、初歩的な使用方法からトラブルシューティングに至るまでをカバーし、ビギナーにも、また相当数経験した医師にも役に立つことを期待している」と述べている。

本書は、日常の診療や学会・講演会活動に多忙を極める中、大木教授率いる東京慈恵会医科大学血管外科学教室の総力によって結実をみた血管内治療医必携の書であり、その完成度は見事というほかない。

〔B5判 頁168 2009年 定価12,600円(本体12,000円+税5%) 医学書院刊〕